

## 岩手県野田村の支援活動報告（2011 年 5 月 14 日）

ボランティアセンター事務局・人文学部・飯考行

今回のボランティアでは、応急仮設住宅（野田中学校に 128 戸新設）への引越し手伝いという、従来の瓦礫撤去や支援物資仕分けと異なる活動が予定されました。1 週間前に、日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）理事長・大阪大学の渥美公秀先生より、NVNAD、八戸工業高等専門学校と弘前大学での「チーム北リアス」としての共同支援の打診を受けて、NVNAD の援助で急遽実現したものです。活動内容のほか、土曜日の実施で（前回以降は毎週水曜日）、ボランティア募集期間が限られ、これまで事務局を務めた李永俊先生と学生が所用により不参加という、番外編的な野田村行きとなりました。

当日はそれでも 47 名の参加を得て（弘前大学生 21 名・教員 2 名・一般 24 名、男女比 25 名：22 名）、補助席も使用して野田村へ向かいました。ロコミのほか、同じ週が前期講義開始にあたり、複数名の教員からボランティアセンター設置の告知がなされたため、ボランティア登録者数が急増した影響と思われる（連休前の 150 名程度から 200 名強へ）。

事務局は山口恵子先生と飯で務め、従来の進行にならない、行きの車内で自己紹介やオリエンテーションを行いました。前回から歌を車内で唄うという新企画があり、個人的にはやや恥ずかしい思いもありましたが、指示通り皆に唄ってもらいました。曲は「しあわせ運べるように」という阪神大震災後に作られたもので、歌詞は「神戸のまち」を「野田のむら」へ替えるなどしました。行きの車内で唄った際は、野田村でこれからボランティアを行おうという気持ちを高揚させる、予想以上に良い効果があるように思われました。

巨大化を続ける瓦礫の集積の山と、「のんちゃん」（野田村のマスコット）像を過ぎると、ボランティアセンターの併設される村役場に到着です。私はほぼ 1 月ぶりの訪問でしたが、役場前の仮設トイレがなくなり、津波で流された写真のコーナーが移され、昼食の配給に並ぶ被災者の列が見えないなど、復興に向かいつつある落ち着きが若干感じられました。とはいえ、海沿いの荒涼とした風景はボランティア初参加者に衝撃をあたえたようです。

揃いの黄色のウィンドブレーカー（弘前大学人文学部ロゴ入り）をまとい、ボランティアアリピーターの神さん指導による準備体操後、ボランティアセンターで予定を確認したところ、引越し手伝いは昼過ぎからとの返答で、午前はいつもの瓦礫撤去に従事しました。



「のんちゃん」像



準備体操

学生と一般参加者、男女別のバランスに留意して3班に分かれたうち、2班は個人宅の畑の瓦礫撤去を、残る1班は寺（海蔵院・避難所）の前の川の清掃を割り当てられました。私は後者の班に入り、道に迷いながら現地に辿り着くと、すでに当日朝に川は清掃済みとのことで、代わりに寺の玄関と周辺の清掃を行いました。その寺に避難者の方は40名ほどおり（村全体で300名弱）、通路で行き交う際にしばしばお礼の言葉をいただきました。



橋の欄干の水拭き



海蔵院周辺の瓦礫撤去

昼食をバス車内でとった後、4人ずつの班に分かれて、引越し補助を行うべく野田中学校へ向かいました。途中の道路は狭かったところ、バス運転手の腕により難なくクリア。プレハブの仮設住宅がグラウンドに立ち並ぶ前で、共同作業にあたることになるNVNADの渥美先生、寺本弘伸常務理事と八戸工専の河村信治先生にご挨拶しました。皆さんから被災者支援と見守りに対する熱意が伝わり（渥美先生は3日前から野田村入り）、引越し手伝いをご一緒するのが楽しみになってきたところで、ボランティアセンタースタッフより、弘前大学メンバー撤収の命。引越し手伝いのニーズに比して、47名は多すぎたようです。ボランティアは「させてもらう」もので、ニーズが最優先されることは仕方ありません。



野田中学校グラウンドに建てられた仮設住宅



ボランティアセンタースタッフの説明

結局、2班は未完に終わった午前の作業を継続することになり、私の所属した班も合流しました。向かった現場は、私たちがかつて作業した久慈さん宅の近くで、久慈さんのお姿もお見かけしました。リーダーの神さんのこまめな指示により、見る間に瓦礫は取り除か

れていきました。広大な畑の表面をスコップで掻いて、引っかかるものを掘り下げると、流木、コップ、ガラス、雑誌、おもちゃ、薬やビデオテープなどが次々に現れます。多くの土砂とともに他所の生活用品を流し込んだ津波の威力が、あらためて実感されました。



発掘された流木、ビデオテープなど



撤去した瓦礫の土嚢への詰め込み

休憩時に、近くに座った学生や一般参加者の方と、とりとめない雑談を交わすなかで、参加者とその周囲にいる多くの弘前市民が、被災地支援を行いたい気持ちを潜在的に持っているにもかかわらず、それを活かす具体的なルートが十分ないと耳にしました。弘前市主催の野田村行きボランティアバスは、4月の土曜日には4台同時運行されたこともあるようですが、5月に入ると弘前大学や市民団体との「チームオール弘前」に統合されて平日(水)週1回ペースに減ってしまい、残念ながら勤め人の参加は難しくなりそうです。

瓦礫撤去作業の終盤に、隣家の方が現れ、津波が押し寄せた際のお話などを語って下さいました。津波で車を含めて様々なものが庭に流れ込む被害を受けたため、瓦礫を見ると「津波を思い出す」とのことで、ボランティアの瓦礫撤去は大変ありがたいと何度もお礼を述べられました。これまで気づかなかった被災者の方の思いに触れることができました。

16時前にバスで野田村を発ち、「のんちゃん」と瓦礫の集積場を横目に、一路弘前へ。晴天で割に暑く風の強かった中で力の仕事だったためか、眠りに落ちる人が大半でした。とはいえ、事務局として、九戸の道の駅を過ぎて高速道路に入ると、恒例のアンケート記入依頼と、全員にマイクを回しての感想聴取を敢行。マイクで拾われた参加者の声は、大学生は新鮮な見方で、一般の方は人生経験を踏まえた含蓄ある言葉で語られました。心が苦しくなった、ボランティア間のコミュニケーションが大事だと思った、国民同士の連帯感を感じる場面もあった、瓦礫を片付けて達成感はあったが地元の方と交流する機会も持ちたい、ボランティアを続けると何でもチャレンジできる気持ちになる、参加するたびに自分自身の成長を感じるなど、いつもながら考えさせられる内容でした。最後に再び唄われた「しあわせ運べるように」は、行きとはまた違う情感に溢れたものに聞こえました。

当初の計画とは異なってしまい、「チーム北リアス」としての共同支援がかなわなかったことは残念ですが、全員無事に怪我なく帰還でき、多くの参加者がボランティア活動を通じて野田村と被災者の方や自身のことを思い返された様子で、今回も実り多い野田村行きとなりました。今後の課題には、週末の野田村行きバス運行を再開し、瓦礫撤去後を見据えた弘前市・野田村間の継続支援・交流のあり方を探ることなどが挙げられるでしょう。